

549-293



1200501507418

549

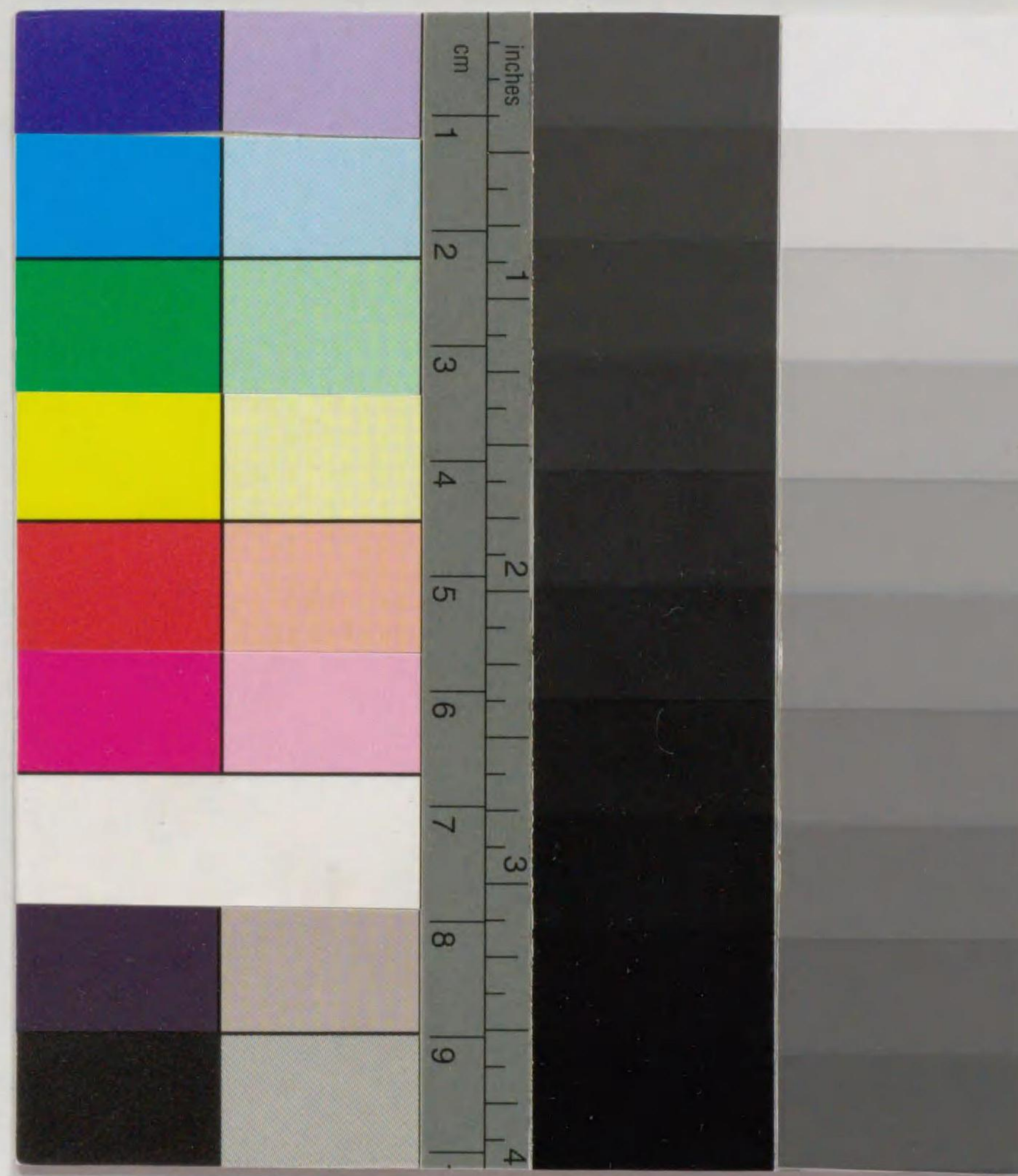
293

箱根山

日本名勝研究会編

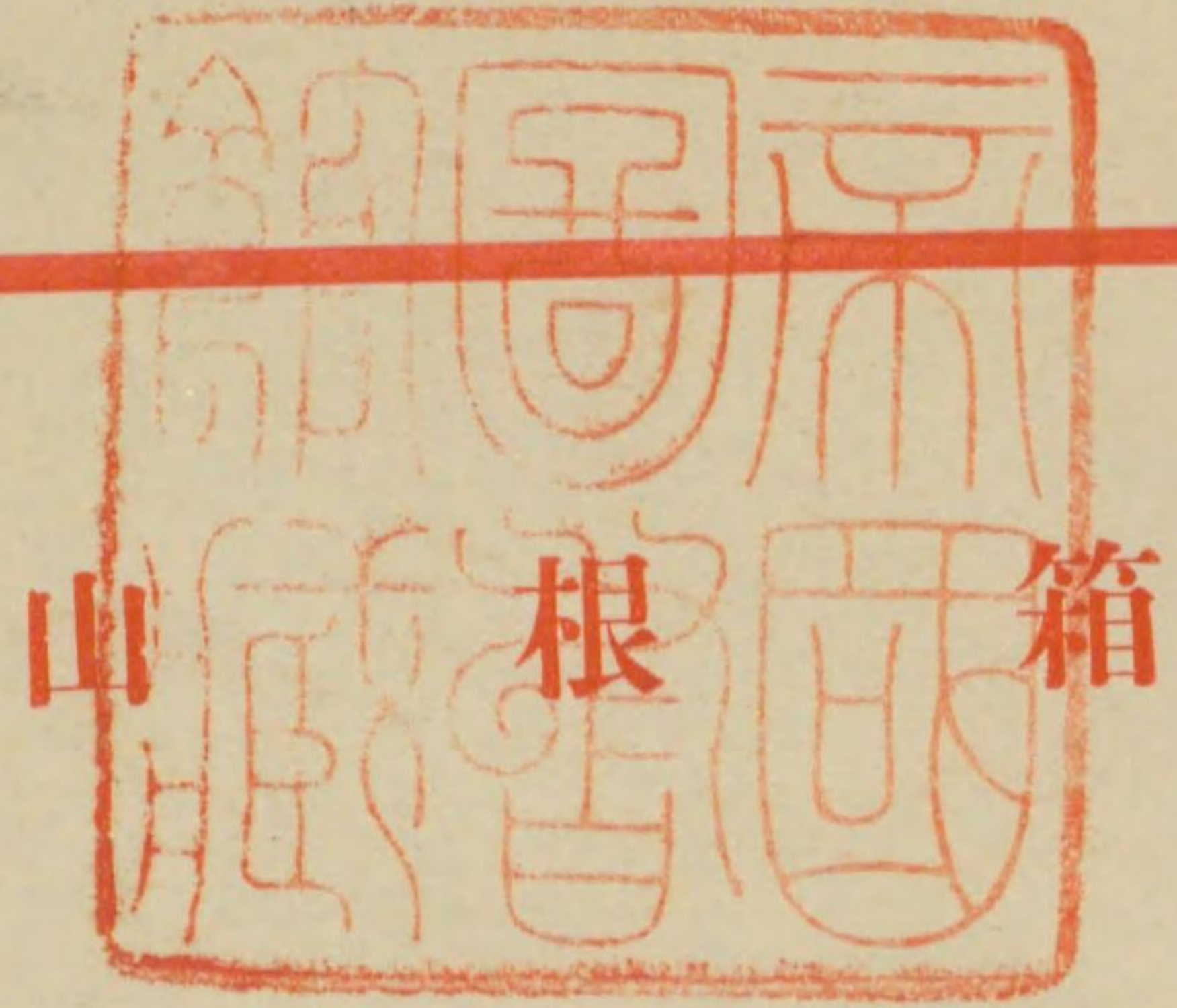
事故本

書未込み
多数



箱
根
山

日本名勝研究會編



箱根山



日本名勝研究會編

549-276

549-293

『名勝研究』刊行趣旨

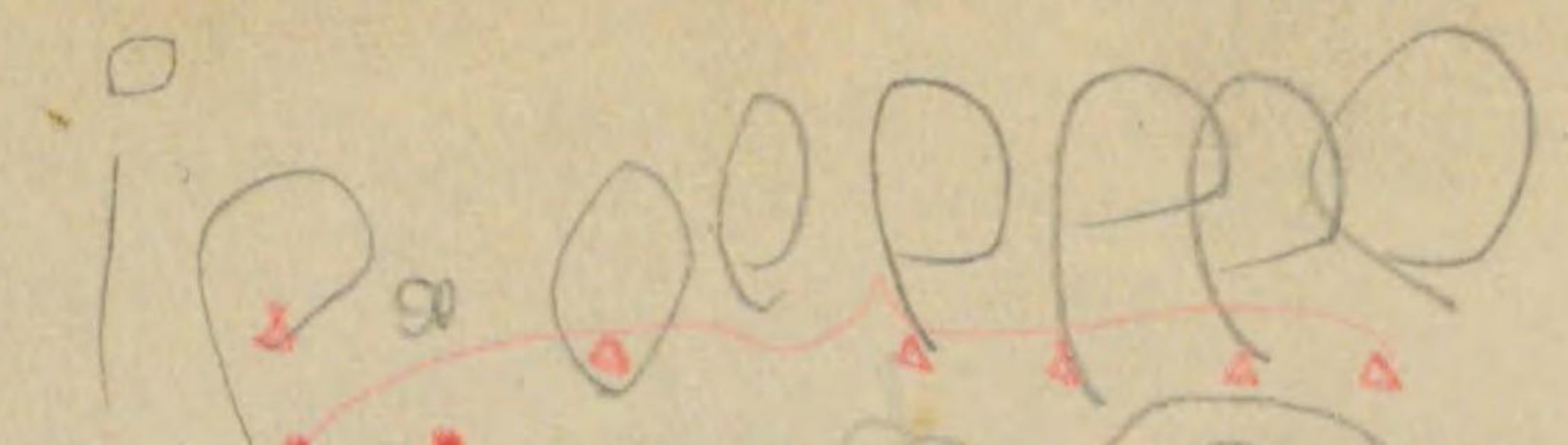
國民の趣味の如何によつて其國の文野をトするに足る、と或る西人は喝破しました。誠に至言であると思ひます。動物や野蠻人の間には色食の慾の外には何等趣味と名づくるほどのものはありません。趣味はたゞ開明の人間のみが有する特權であります。多くの趣味のうちにて、讀書趣味と旅行趣味とは最も高尚有益のものとされて居ります。一は書籍を通じて智識を向上せしめ、一は見聞によつて知見を磨くのであつて、兩者共に文明の進歩に正比例して普及の趨勢にあるところの、至上の趣味であります。私は生來極めて、旅行に趣味を有して居りますので、曾て旅行會を組織して同好者と共に此の趣味慾の満足を計つたことがあります。當時私の最も遺憾に感じたことは、適當なる指針の缺乏でありました。所謂案内書なるものは汗牛充棟も曾ならぬほどにありますけれども、何れも低級淺薄のものであつて、智識階級者の手引にす

るに足りるものは絶無であります。私は團體の先達たる責任上から、諸書を涉獵して自ら適當なりと信ずる指針を作製して責任を果したのでありますが、その調査書類が私の狭い書齋に積んで山を爲してゐる次第であります。此頃同好の先輩知友諸氏が切に此の調査の結果を刊行して。同好の士に願はんことを慫慂しますので、私も此の試みが多少にても同好者の手引となると共に、更らに旅行趣味の普及を圖る一助ともなれば幸甚でありますから、斷然意を決して、日本名勝研究會なるものを組織し茲に「名勝研究」を刊行する事にした譯であります

著 者 識

目 次

箱根の山容	一	早 川	一〇
箱根火山	二	三枚橋	一一
火口瀨	二	畑ヶ平遊園	一二
温泉分布	三	石垣山	一二
箱根の奇勝	四	玉簾瀧	一三
箱根山の成生	五	白地藏	一三
湯本温泉	六	初花忍の瀧	一三
早雲寺	八	雑木茶屋	一三
曾我堂	九	舊官道	一三
須雲川	一〇	弘法大師疣水	一四
			皂莢坂の力餅	一五
			甘酒茶屋	一五



湯坂	一五
塔ノ澤	一六
阿彌陀寺	一八
霧瀧	一九
宮ノ下	一九
淺間山	二〇
堂ヶ島	二〇
松ヶ岡遊園	二二
明星ヶ嶽	二二
鷹巢山城址	二三
高山園	二三
新田義隆の碑	二三
蛇骨川	二三
底倉	二四
小涌谷	二六
木賀	二七
宮城野	二七
ル將軍の碑	二八
強羅	二八
早雲地獄	二九
仙石原	二九
大涌谷	三〇
ゴルフコース	三一
金時山	三一

乙女峠	三二
長尾峠	三三
大雄山最乗寺	三三
姥子	三四
湖尻	三五
駒ヶ嶽	三五
硫黄山	三六
神山	三七
蘆ノ湯	三七
笛塚	三八
阿字ヶ池	三九
藥師堂跡	三九
鶯坂	三九
曾我兄弟の墓	三九
二十五菩薩	三九
蘆ノ湖	四〇
箱根町	四三
元箱根町	四四
箱根神社	四四
箱根離宮	四六
箱根關址	四六
鞍掛山	四八
十國峠	四八
施行平	四九

旅杖の痕

海道記 五一
 廻國雜記 五三
 丙辰紀行 五四
 庚子道の記 五五

名勝研究

箱根山



箱根の山容

箱根山は足柄山の南、足柄下郡の西部に屹立せる火山であつて、其の形状頗る雄偉を極め、關八州第一の天險として徳川幕府の重きを置き、維新に至るまでは蘆ノ湖畔、箱根町に關所を置いて、上り下りの旅人を點檢したものである。

上下八里の險道は小田原と三島とを東西の麓の固めとし、酒匂、馬入、黄瀬、富士の諸川は自然の防禦線を爲し、箱根山はその中央に蟠居してゐるのである。山容は峰巒澗壑相錯綜して、其間を縫ふやうにして東海道古驛路が通じてゐる。試みに國府津の

海岸に立つて箱根山を仰いで見た人は、誰しも其の雄大なる山容に驚嘆しないものは無いであらう。蓋し國府津の海岸は箱根山を一眸の中に集めるに尤も好都合の地點であると言はねばならない。

○箱根火山

箱根火山は成層火山中の複火山であつて海拔千四百三十九米突。

一群の火山邱に中央火山の四峰ある。神山、駒ヶ嶽、上双子、下双子が之れである。外輪山は金時山、明神山、明星嶽、淺間山、鷹巢山、要害山、鞍掛山、箱根峠、山伏峠、三國山、湖尻峠、乙女峠の諸峰が橢圓形をなして、其の南北の直徑約三里東西一里半に及び、我國の火山中では肥後の阿蘇山を除きては斯くの如く大きな火口を有する火山は無いのである。此の山状からして學者の推測するところによると、有史以前に於ては富士山にも劣らぬほどの高山であつたものが、中央火口の邊に龜裂を生じ、陥没して今日の如き大火口を生じたのであらうといふことである。

火口瀨

外輪山と中央火山との間に二つの谿流がある、共に火口瀨で、西

を須雲川と云ひ東を早川といふ。兩谿流は湯本に相會して相模灘に注入してゐる。上双子、下双子、駒ヶ嶽など何れも塊狀火山であつて、其傾斜甚しく頂上には夫々火口を有してゐる。神山の側に冠嶽がある。其の形狀の突兀を極めてゐるのは、大地獄の爆發によつて、山の幾分を噴き飛ばしたからである。其の爆發物のために山下一帯の樹木が埋没せられ、それが埋木、即ち神代杉と云つて所謂箱根細工の重要な原料となつてゐるのである。箱根の火口原は其の地形から三つに區別することが出来る。即ち仙石原、宮城野及び蘆ノ湖がそれである。箱根には火山噴出の餘勢が未だ盡きないで、蒸氣の噴出極めて盛んである。神山の如きは最も著しく、大地獄、小地獄、早雲地獄等があり、何れも硫氣を噴出して、大地獄の如きは嘗て盛んに硫黃を採取したものである。

温泉分布

此の箱根山塊を中心として處々に湧出してゐるのが所謂箱根温泉である。昔は湯本、塔ノ澤、宮ノ下、堂ヶ島、底倉、木賀、蘆ノ湯の七湯であつたが、

今日では強羅、大涌谷、小涌谷、湯ノ花澤、姥子、上仙石、下仙石の諸湯を加へて箱根十四湯と言はれてゐる。

酸性泉 上仙石、下仙石、強羅、小涌谷、大湧谷、

硫黄泉 蘆ノ湯、湯ノ花澤、

鹽類泉 姥子、木賀、底倉、宮ノ下、塔ノ澤、

單純泉 堂ヶ島、湯本、

箱根の奇勝

温泉と風光とは實に箱根の生命であつて、今日では世界の箱根として其名を天下に知らるゝに至つた。殊に晩秋の紅葉と、爛春の櫻花とは最も名高く、山谷悉く紅雲に彩られてゐるの觀を呈するのである。而し乍ら紅葉と櫻花とを除き去つても、その山容水態は依然として天下の奇勝たるを失はない。若し夫れ健脚に鞭つて神山や駒ヶ嶽、双子山に登攀し、更に勇を鼓して外輪山の踏破を試みたならば、即ち箱根探勝の堂に入つたものと言ひ得るであらう。

箱根山の成生

箱根火山の内部の構造について見ると、早川、須雲川に浴ぶて凝灰岩があり、其上は普通集塊岩を以て覆はれ、山上に行くと熔岩があつて更に其上を覆ふてゐる。今箱根山生成の歴史を考へて見ると、最初に噴出したのが凝灰岩であつて、之に亞いで噴出したものは集塊岩である。そして其上に最後に鎔岩を噴出したものと見ることが出来るのである。

斯の如く箱根火山は幾回もの噴出によつて出来たのであるが、其後更に陥落して大なる火口を生じ、其後更に噴出によつて先づ神山が出来、同時に上下双子山を其南に生じ、最後に駒ヶ嶽が出来たものと推定することが出来るのである。爾後漸次に風雨霜雪の爲めに浸蝕せられ、溪谷を生じ、火口原には水を貯へたが、この停水は山の一方を決して須雲川となつて流れてゐる。其後今度は駒ヶ嶽と神山との中間、湯の花澤が破裂して多量の泥土を流し、須雲川を塞ぎ、蘆ノ湖の水が爲めに漲溢し、終に宮ノ下の一方を崩壊して、其北部に新たに早川を生じ、そこで湖水は漸次減水したのである。

其後又大地獄の破裂があり、西北に向ひて泥土を噴出し、蘆ノ湖の水を壅塞したのであるが、又早川に落ち、湖水は愈よ減却し、爾後水を須雲川に落さないやうになつたのである。故に早川の谿谷は深刻ではあるが比較的新しいものである。早雲地獄などはそれから後に出来たのであるが、何れも有史以前のことであつて、口碑などには少しも残つてゐない。

湯本温泉

湯本村大字湯本にある。箱根山の表玄關口とも言ふべく、小田原電車湯本驛の所在地である。地は箱根山彙の東麓火口瀨にあつて、早川の南岸に位し、海拔三百四十三尺、早川と須雲川との會流するところである。小田原町を距る一里半。須雲川に浴へる箱根舊道と、早川に浴へる底倉道と、湯坂道との三道此處に會合してゐる。湯本細工とは主に食器を造るものであつて、轆轤を使用してゐる。精巧愛すべく山中には所々に工匠があるけれども一般に湯本名物と呼ばれてゐる。餘程古くからあるもので、元龜元年九月湯本にて御番細工をなすべき由、北條氏から番匠への

下知の文書がある。

温泉は湯坂山の麓の岩罅の間から湧出してゐる。湯本といふ名は此の地が最初に温泉湧出の地であるから名づけられたといふことである。温度百五十度を保ち無色透明の單純泉で、神経病、リウマチス、婦人病、胃病、火傷等に特效があると稱せられ、浴舎は翠色滴らんとする湯坂山の麓を巡り、早川の清流に臨んで軒を連ねてゐる（旅館＝福住、和泉館、小川、大和屋、住吉等）

源平盛衰記——治承四年八月二十二日、兵衛佐（頼朝）三百騎を引具して早川尻に陣を取る、早川黨進み出で

こゝは軍馬には悪く侍り、湯本の方より敵山を越て、後を圍む中に取籠なば、由々しき大事なり……

東關紀行——湯本といふ所に泊りたれば、深山風烈しく打時雨れて、谷川の漲増る巖瀨の浪高く咽ぶ。彼源氏

物語の歌に、泪催す瀧の音哉といへる、思よられて哀なり……

菅親武鑑——天正十八年三月、豊太閤小田原御發向、北條は湯本口へ千葉新介等を出し是を堅める、又云、小

田原の人数、持口を捨て、逃れば、味方は敵城を取巻、太閤御出陣は湯本也……

豊鑑——天正十八年卯月初日、秀吉公湯本眞學寺に至り玉へば、先軍のものどもは、佐川、早川の海邊……

早雲寺

湯本村早川の南方、早川と須雲川との合流點の丘上、舊東海道を登ること約三丁にして、落葉枯木の間に寂然と立つてゐる禪宗の巨刹である。舊名を眞覺寺と云ひ金湯山と號す。舊官道がその傍を下り、早川を渡る處に三枚橋が架かつてゐる。此寺は伊勢新九郎長氏の本願にて永正十六年に大隆禪師の開基、後北條五代の菩提所である。豊太閤が小田原征伐の時此處を本陣にして家康其他の諸將を饗待したので名高い。佛殿には長二尺の釋迦像を安置してゐる。長氏は伊勢平氏の末裔であつて、後ち小田原北條の城主となり、法名を早雲と稱した。境内本堂の西北に當る丘上に北條氏五世の墳墓が竝んでゐる。碑背に寛文十二年北條伊勢守氏治再建の由が彫りつけられてある。また其の東の方に連歌で有名な宗祇法師の墓がある。宗祇は種玉庵芳蘭と號し、文龜二年七月此地に沒したのであるが、終焉記によれば、遺骸は駿州桃園定輪寺に葬るとあるから、當寺の墳は恐らくは終焉の舊蹟を記念する爲めに建つたものであらう。此墓は長四尺許り、四面共に文字を刻してあるけれども磨滅して讀み難い。寺内には又狩野元信の龍虎の襖がある。

新編風土記——早雲寺は臨濟宗、大永元年北條氏綱の創建、先考早雲庵宗瑞の遺言に任せ之を置く。故に今は宗瑞を以て開基と稱す。

小田原記——永正十六年八月十五日、早雲庵宗瑞、伊豆國韭山の城にて逝去し給ふ。即當國修善寺にて一片の烟となし申ける。遺言に任せ、相州湯本眞覺に一寺を建立あつて、佛覺法堂山門衆寮以下、大徳寺を寫し、別普請成就しければ、紫野より此派の以天和尙を請じ下し、住寺に居申ける……

早雲寺

羅山

近時直指市郎弁、自買檀那賣世尊、野麥兀々法堂草、這中應有禪沙門。

南郭

早雲寺覽古

臺殿松杉入空翠、巋然獨存知何寺、綺羅春殿舊時花、墓草碑苔冢累々、憶昔永正元龜中、天下車書久不同、萬邦瓜剖相吞滅、龍戰虎爭誰不雄、何意中原出霸王、一旦長驅入封疆、石垣山上臨闔境、雷擊天雷不可障、即今四海日月新、此地爲餘供香人、野店山橋無情甚、往來屢送馬蹄塵。

會我堂

元は同村内湯本の臺に上らんとする道の傍らにあつたが、明治元年火災の爲め焼失したので、今は同所の上の方、宇湯本茶屋正眼寺の境内に假堂とし

て残つてゐる。堂内に曾我兄弟の位牌を安し、十郎の方は高崇院殿峰巖良雪大禪定門、五郎の方は鷹嶽院殿士山良富居士の文字があり、高さ各二尺、法名の書風、位牌の形などから押して、餘り昔のものとは思はれず。又何の緣故によつて此寺に安置されたのであるか、其由來も判り難い。虎御前の祀つたものであるといふけれども確かでない。

須雲川

溪流の名である。此の溪流は蘆湖の南東の壑中から發し、双子山聖嶽の間を迂曲して湯本に至り、早川に合するのである。延長二里半、近世の箱根官道(舊道)は此溪流に沿ふてゐるのである。

早川

源を蘆湖に發して、仙石原の平原を過ぎ、左に金時山、明星ヶ嶽右に冠ヶ嶽、早雲山、小地嶽山等の間を潜り抜けて、堂ヶ島、塔ノ澤、湯本などの温泉場の前を流過し、須雲川を併せ、小田原市街の南、早川村に至つて海に流入してゐる。延長六里、その西岸は絶壁屏風を立てたるが如く、奔湍岩に激し、滔々として水

勢頗る急である。新選六帖に「早川の瀬ざり危き船渡りそがひに向へ道遠くとも」といふ歌がある。

東海道圖會——湯本より東五町許り、三枚橋へ出る。是より東海道の本道なり、此末を早川尻と云ふ。盛衰記に、佐殿早川尻に陣取ること見え、太平記には、元弘の亂に、參議平成輔朝臣を早川尻に斬奉りしことをのす。又觀應二年十二月、上杉憲顯が、千葉介の一族と早川尻に戦ふことあり。

三枚橋

早雲寺の東、湯本村字山崎にある。早川に架した橋である。戊申の亂に伊庭八郎が林肥後守を盟主として江戸を脱走し、部下の士と共に官軍に抗して雷名を傳へたところである。

新編風土記——三枚橋は東海道中早川に架す、此處より西折、温泉場への岐路ありて、橋邊茶舗軒を連れて、湯本細工及び米饅頭を鬻げり、橋を過ぐれば道次第に崎嶇、往來甚だ艱めり、路の左右峯巒層見疊出、加之早川の流噴迫して、水聲琅然、頗勝地なり。

またこの橋の附近に老杉があつて矢立杉と稱へ、昔はこの杉に矢を射立て、軍の勝敗を占つたと傳へられてゐる。曾我兄弟も仇討に赴くとき、此處を過ぎて矢を射立てた

と曾我物語に出てゐる。今は枯れて無い。

畑ヶ平遊園

早雲寺門前の細道を登ること約七町にして達する。櫻、楓などを植えて、極めて雅致に富める遊園である。此處に小田原電鐵會社發電所貯水池があつて、夏季は水泳を試みるものが多い。

石垣山

一名笠懸山といふ、早川村の西にあたり、湯本の東南に聳えてゐる。海拔八百尺、東北に小田原城を俯瞰すべく、眺望絶佳の地である。北條早雲が此處から突撃して小田原城を奪取して其城主となり、後天正十八年、松田尾張守康長の内通によつて、豊太閤が小田原城を攻めたときに、此處に陣所を置いて持久對陣の策をとり、一夜城を築いたり、井戸を堀り、殿宇を建て、庭園を作り、田圃を耕し、歌舞音曲に耽溺して關東武士を煙に卷いた舊蹟である。故に一名天守臺とも言ふ。山南は直ちに石橋山に連続してゐる。早川村から登り十五町餘、其處から湯本に下る路もあり、又箱根町に通ずる路もある。所謂太閤道がそれである。

玉簾瀧

湯本温泉から須雲川の釣橋を渡り、隧道をぬけて川添ひに右へ上ると四町ばかりにして瀧へ出る。そこは湯坂山の麓にあたり、遊園地になつてゐて、別荘あり浴場あり茶亭ありで、雅致に富んでゐたが、大正十二年の大震災のために崩壊し、今は昔日の面影はない。

白地藏

湯本温泉東側の本道を行くこと二町ばかり、坂道を少し登れば巖腹に刻める高さ六尺の菩むせる地藏尊がある。弘法大師の作と言はれてゐる。

初花忍の瀧

玉簾の瀧から行くのと、湯坂道を上り雑木茶屋の方から行くのと二道ある。この瀧は初花が夫勝五郎の病氣平癒を祈るため三七日の水垢離をとつたところであると言はれてゐる。

雑木茶屋

須雲川部落の入口にある、昔は馬の立場茶屋であつたが、今は閑雅な茶店がある。断岸絶壁を向ふに眺めて、休憩するには適當の位置を占めてゐる。

舊官道

湯本から須雲川の右岸を進むと舊官道である。道は躑て須雲川橋

を渡つて左岸に移る。路傍にはハコネシダ、クジャクシダ、ヒカゲノカツラ等の羊齒類多く、附近は小田原電鐵の水力取入口で、巨大の岩脈が火口瀬を横ぎり、自然の大堰堤を爲してゐる。そこから更に西海^{さいかい}地^ち坂^{さか}、檀木^{かしのき}坂^{さか}、猿滑^{ざるすべり}坂^{さか}、於玉^{おたま}坂^{さか}等の險があつて老杉の株痕も所在に蟠り、かなりの峻道である。附近の丘陵は何れも水蝕丘で、双子山の麓には飛龍瀧がある。これから畑宿までは深谷を作つて須雲川に合する。これから河畔を傳ふて上れば大津に出られる。此の深谷はハコネサンセウウオの産地として著名なところで、河底の岩を覆せば所々に蝶蛭に似たものを發見することが出来る。頼三樹幕府の爲めに捕はれて江戸に護送される時此道を通つた左の詩を物す。

當年意氣欲凌雲、快馬車馳不見山、今日危途春雪冷、檻車搖夢過函關、

弘法大師疣水

湯本村須雲川の地を過ぎて橋を渡れば左側に高さ六尺位の石がある。その石の凹んだところに水が溜つてゐて、それを疣につければ不思議に癒ると言ひ傳へられてゐる。

自茨坂の力餅

湯坂道即ち舊箱根道第一の難所を踏破して昔の交通の面影を偲ぶのも旅行者にとつては面白いであらう。こゝで力餅といふのを賣つてゐる。その謂れは詳でない。

甘酒茶屋

双子山の南麓舊東海道名代の甘酒茶屋は、赤穂義士神崎與五郎東下りの浪花節に人に知られた茶屋である。馬喰丑五郎馬繋ぎの古木も残つてゐる。神崎の用ひたといふ茶碗も秘藏してある。附近に笈^{おひ}の平といひハコネダケの叢生してゐる所がある。

湯坂

湯本村から朝日橋を渡つて新國道を進むと、左に險峻な湯坂といふ坂道がある。西に山の尾を登り、鷹栖、蘆湯を経て、双子山の北西を廻り、箱根權現へ至る山徑である。即ち之れが元和四年以前の驛路で、東鑑治承四年十月、石橋山合戦の時「北條殿者、經營根湯坂、欲走甲斐國」とあるのが是である。

あつまちの湯坂をこえて見たせば鹽木なかる、早川の水(十六夜日記)

會我物語——湯坂峠にて、十郎跡の方を顧りみ、會我の里の朝まだき、煙もいまだ晴やらぬ、佐川、古宇津、高禮寺の山の方を見やりては、別れし大磯宿の事思ひ出られ……

塔ノ澤

湯本の停車場から約四町、湯本村大字塔ノ澤で、湯坂山と塔ノ峰の兩山相迫る處、早川の清流がS字形を描いて美しい溪流美をなす形勝の地位を占めてゐる。海拔四百二十五尺、早川の兩岸に跨がり三方は丘陵を繞らし、早川の急流は其中央を流れ、塔の峰（一名勝驪山）は玉ノ緒橋畔に峙立して、阿彌陀寺があり、風色極めて幽雅の地である。旅館に玉泉樓、玉の湯、環翠樓、一の湯、藤屋、福住樓、新玉の湯などがあり、何れも立派な建築である。泉質は鹽類泉で辰砂を帯びてゐる。明治の元勳伊藤公も此地を最も受賞して屢々遊びに來られたことがある。溪流の美と岩石の奇とが此地の特色といふて良いであらう。此湯の紀元は其説を區々にして判然しないけれども、村内阿彌陀寺の開山彈誓が、慶長中秋山道伯（元湯彌五兵衛の祖）と謀りて開發したと言はれてゐる。水戸黃門光圀卿、明人朱舜水を召具せられ、此地

に入浴されたときに、舜水が唐土驪山の温湯に勝ると對へた由である。蓋し驪山とは唐の玄宗皇帝が美人楊貴妃と共に浴したる有名な温泉である。

塔之澤

南郭

傳言此地勝驪山、靈液殘開大獄間、一自始分神女澤、至今長駐里人顔、往來不盡疑香漢、浴罷何妨共玉環、肌骨并除塵垢事、便應輕舉踏雲還、

寬齋

浴塔澤温泉數日 小詩紀事

一道靈泉分七處、成邨各々倚巖巖、能愈世習輕浮病、使我新詩超不凡、僧房密被濕雲封、石磴苔深蔭惟松、祇有遊人破岑寂、連聲來叩不時鐘、（寺名淨福院、無僧侶主、但有古鐘、任遊人縱撞）
迅湍危石響如雷、徹夜孤燈夢未催、可怪東 知已抹、不聽鴉子報晨來（山中鴉皆啞）
綠樹重々隔世氣、溪聲朝暮耳邊聞、飄然身在仙寰裏、不省人間指作雲、
向來未盡愛山情、霧後溪橋倚杖行、樵逕雲遮人不到、傍巖閑摘石長生、（石長生俗喚做箱根草）
塔澤環翠樓主、爲我語故靜寬院內親王事、內親王明治十一年秋薨于此云、 廉 堂
風兮喪鳳足悲傷、降嫁况遭東府亡、十歲孤栖留大奧、八洲遺俗稱公方、靈泉寄跡歌猶在、雲駕還京恨轉長、
車馬勝驪山下路、幾人洒淚靜寬堂

前大納言忠平

右近中將定成

夏としも冬としもなく年へぬる塔の澤へのやとそたのしき

皆人のよはいをのふる塔の澤にわきていて湯の庵そにきあふ

阿彌陀寺

塔ノ澤の内、塔の峰を十七八町登つたところの南半腹にある。浄土宗の名刹で、阿育王山と稱し、阿育王が佛舍利を安置した八萬四千の寶塔の中、本邦に存する三ヶ所の一である。芝増上寺の末派に屬し、開山は僧彈誓、慶長十年大久保忠隣の創建である。本尊の阿彌陀佛は惠心の作であつて、長四寸五分、元は江戸本所回向院の本尊であつたのを、四世喚靈が之を當寺に寄附したものである。其の脇壇に、西國三十三番觀音の摸像及び聖徳太子作の地藏尊も安置してある。開山彈誓上人は慶長十八年五月二十五日京都大原古知谷の阿彌陀寺に入寂した。今の寺は嘉永年間三十三世の住僧隆月の再興したものである。「箱根靈驗覽仇討」に、初花が夫勝五郎の車を曳いて「こゝらあたりは山家ゆえ紅葉のあるのに雪が降る」といつた有名な文句は、此の寺のあたりを背景にした作者の意圖であつたと言はれてゐる。

霧 瀧

塔ノ澤から早川を渡り、坂路を登ること數町にして霧瀧に出る。高さ一丈餘、浴客の散歩には好適の地である。又對岸の臺ヶ岳の麓に發電所がある。それは横濱市の電燈に使用するものである。

宮ノ下

湯本から脚下に涼々たる早川の谿流に沿ふて溯ること一里二十町、温泉村字宮ノ下にある。此處に箱根電車宮ノ下停車場がある。海拔一千百二十三尺、明星ヶ嶽が川を隔て、東北に聳え、駒ヶ嶽、早雲山、蓬萊山など西に連亘して恰も屏風の如く南西北三方を圍繞し、東の方、峰巒の盡さる處から遙かに相模灘の烟波を望んで、雄大なる展望を擅にすることが出来る。十四湯中最も風景に富み、且つ繁昌を極め、箱根の中心とも言ふべき地である。温泉は淺間山麓から湧出してゐる。弱性鹽類泉で無色透明、微かに鹹味を帯び、温度は百二十五度乃至百四十度である。旅館は一を富士屋と云ひ、一を奈良屋と云ひ、共に壯大なる洋館であつて、滯留客の徒然を慰むる玉突、揚弓、寫眞舖等一つとして備はらざるは無い。明治六年には明治天皇、英

照皇太后の御幸があつた。御用邸は富士屋ホテルから底倉に至る間の高燥の地にある。此處の温泉は、リウマチス、神経痛、胃腸病、子宮病、貧血諸病等に効能多く、内服も胃腸肝諸臓の病氣に特効があると言はれてゐる。新篇風土記に據れば此湯は應永十年安藤隼人介といふもの、鎌倉殿の命を受け當所に於て新田義隆を討取り、其賞として宮ノ下と木賀の地を賜はつたといふことである。此地から底倉へ三町、堂ヶ島へ五町、木賀へ十二町、何れも浴客の散歩に適する場所である。

浅間山

一名上の山と云ひ、登ること一町餘にして熊野神社に達し、更らに十町にして頂上に達する。此處の展望は更らに雄麗であつて、房總半島、伊豆の大島など一眸のうちに收まる。そこから小湧谷、千條の瀧、鷹の巢城址などへも行かれる。

堂ヶ島

底倉村字堂ヶ島にある。宮の下停車場から三町乃至五六町の間にある。宮ノ下から急勾配の坂を下ると播鉢の底のやうなところがそれである。四面に

丘陵相迫り、東北は早川の對岸に明星ヶ嶽が屹立して、其麓に白絲の瀧が懸つてゐる。此地は森樹翁鬱として日光を遮り、展望の點には遺憾があるけれども、箱根第一の幽邃境として、また別様の趣があり、夏日の爽涼は最も氣持が可い。此湯は正保三年に始めて開かれたもので、單純泉にして三ヶ所に涌出し、夢想湯、薬師の湯、神山ノ湯と云ひ攝氏の四十度内外である。豊太閤の浴した石槽といふのがある。俗に太閤の石風呂と唱へ、長六尺、幅一尺、一度地震のために埋れたのを、文化年中に掘出したものである。又夢想國師の草庵址といふ草堂が、近江屋と大和屋の直ぐ傍なる小高い丘上に残つてゐる。國師が此山中に幽栖した事は禪林僧寶傳などにも載つてゐることで、堂ヶ島の地名も此の草堂より起つたものであると思ふ。また別に國師の坐禪石といふものもある。國師は足利直義の師事した名僧であつて、鎌倉の建長寺を開き、こゝに草庵を結んで閑居したといふことである。旅館は近江屋、大和屋、江戸屋で、別に平松某の別荘があり、庭内に調の瀧といふのがある。高さ十五丈、幅五尺、形ち數條の線絃

を懸けたるが如く、水聲また琴の音と相似てゐるので此名がある。

青山幾度變黃山、浮世紛々總不平、眞裏有塵三界窄、心頭無事一牀寬、

夢想國師

松ヶ岡遊園

堂ヶ島の東側の下り口のところにある。宮ノ下、強羅等を眺められる閑寂境として滯留客の好散策地となつてゐる。土地の人宮田氏の經營する處であつて、茶亭、休息所、浴室などがあり、公衆の爲めに開放されてゐる。

明星ヶ嶽

堂ヶ島から溪流を渡つて右折し更に左折して一時間餘にして山頂に達する。眺望快豁、富士山の直前なる山脈の低處は御厨峠であつて、右に金時山、明神嶽、後に大山、丹澤山及び一帶の丘陵を望み、小田原の市街、大島を浮べたる太平洋、其右に石垣山、二子山、駒ヶ嶽、神山、臺ヶ嶽を望むことが出来る。白糸の瀧、不動の瀧、三ヶ月の瀧、葉陰の瀧、愛染の瀧、千條の瀧などがある。

鷹巢山城址

鷹巢山の頂上にある。小田原北條の出城であつたが、後徳川氏の爲めに奪はれたところである。眺望が極めて雄大である。

高山園

底倉葛屋旅館の背後にあつて蛇骨川に面せる約一萬坪の地を遊園としたところである。高山植物を培植したり、徴古館を建て、箱根の史蹟を知るに便ならしめたりして、一般に公開してゐる。

新田義隆の碑

底倉から二ノ平、小涌谷に通ずるところにある。南朝の忠臣新田義隆戦死の記念碑である。

蛇骨川

八千代橋を隔て、宮ノ下と相對する處を底倉と云ひ、橋下の川を蛇骨川といふ。その源を芦ノ湯の近傍阿字池に發し、蓬萊、鷹巢兩山の間を流れ、池尻の水を集めて底倉に至り、懸谷をなして早川に落ちたものであつたが、その基底は柔軟な早川層灰岩であつたため、忽ち削蝕され、蛇骨瀧の岩角に至つて止まつたものであつて、此地が古來温泉に恵まれたのも、亦水蝕の餘慶に外ならない。温泉の沈澱物たる珪華が国道附近に堆積して厚層を爲し、或は木の葉を印し或は蜷の類を含有してゐる。その葉脈を残してゐるものは恰も蛇の骨骼に似てゐるので、里俗之を蛇骨と

稱し、一時は齒磨の原料として採取した。此の谿谷の陰地には苔蘚植物が多く、ツノゴケ、ウロコゴケ、タケノシブ、ハコネシダ、リヨウメンシダ、ハナワラビ等を發見することが出来る。

底倉

今大平臺を合せ温泉村といふ。宮ノ下の町續きであつて、宮城野の東南に位し、北は早川を隔て、明星ヶ嶽を望み、南は蛇骨野、山地嶽に連り、西は直ちに蛇骨川の懸崖に接してゐる。温泉は此川の左岸から涌出するのであつて、温潤湯、靈泉湯、梅の湯、萬壽湯、神靈湯等の名がある。應永十年新田相摸守義隆が金創を癒さんとして湯治に來てゐたのを、足利方の安藤隼人介に攻められて討死したところである。其他太閤の小田原攻の時に夜營地となつたこともあり、伊達政宗が幽閉されたり、却々歴史に富んだ温泉場である。泉質は宮ノ下と同じく弱性鹽類泉であつて、温度は攝氏の七十二度から四十三度迄の間にある。旅館は蔦屋、梅屋、仙石屋等。蔦屋の前から木賀へ出る路の左側の崖に白鷺の瀧が懸つてゐる。温湯の瀧であるので名高

ゝ。直ぐ傍から温泉も湧出してゐる。

鎌倉大草紙——新田殿は去永徳の頃迄、信濃國大川原と云所に深く隠れ有けるを、國中皆背き申、宮を初め新田一門、浪合と云所にて皆討死して、父子唯二人打もらされ、奥州へ逃下り隠れ給ひしが、小山若丸が亂により、奥州にも安堵せず、相州へ忍び行て、箱根山の奥に底倉と云所に、木賀彦六と云者を頼て隠れ給ひしを、如何にして聞出しけるにや、竹下の住人藤曲と云ふもの忍來り、應永十一年四月廿五日、新田相摸守入道道啓、底倉の山中にて討死あり。

鎌倉管領九代記——新田一族の末、相摸守義則は、わづかに影を隠し、底倉の庄に居住して、時節を待ける處に、古我彦六入道聞つけて、手勢二十餘人を率して夜中に押寄たりけるに、新田は郎黨等二人と共に起合せ、散々にたゝかふ、流石大勢の敵なれば叶はずして、數多所に手を負、今はふせぐに力なく、主従三人家に火を懸、腹かき切て失にけり、新田の一族は雲にのぼり、穴にかくれてと、日本國中には跡を留めて時を伺ふに、更に身の置所なし。

伊達成實日記——天正十八年六月、太閤様小田原へ御陣の由申來候に付、米澤より越後信濃に御懸、小田原御參着被成候所、そこらと申山中に御宿を仰付られ候、かやうの山中へ、被押籠候儀、下々氣遣仕候處に、一兩日過、太閤様、政宗をば方々よりくみ候由御意被成、會津取候慮外に被思召候間、可被召上候、本領御別儀有間敷候間、御禮可仕被仰出候。

小涌谷

底倉から道は二つに岐れ、左すれば小涌谷、蘆ノ湯へ、右すれば木賀、強羅、仙石、姥子等の諸温泉へ行かれるのである。小涌谷は舊名を小地獄と云ひ、底倉から蘆ノ湯温泉に行く途中、温泉村字小涌谷にあり、底倉を距ること緩傾斜の路を約十五町、小涌谷驛から四町、蓬萊山の傾斜地にあつて眺望開豁の好位置を占めてゐる。海拔千七百餘尺、以前は山谷の大地一面に湯を噴出して、雲霧を立て罩めてゐたのであつたが、その噴出氣を冷却して温泉を得てゐるのである。泉質は酸性收斂綠礬泉であつて、小地獄山の半腹から涌出し、色は蒼灰色を帯び、少しく敗卵の臭氣を放つてゐる。貧血症、腦及び脊髓諸病、胃病、神経痛、ソウマチス、婦人病、劇性粘液漏、慢性加答兒、微毒、皮膚病、虚性出血等に効驗ありと言はれてゐる。旅館は三河屋と小涌谷ホテルの二軒であるが、何れも清潔である。此地からは二ノ平や強羅公園など一眸の裡に納め、明神ヶ嶽、明星嶽などから、左方強羅を越えて宮城野方面を望むことも出来る。殊に陽春の候には、櫻花爛漫實に箱根山中の絶勝である。蓬

萊山にはまた一面に躑躅を生じ、鳳萊園内にも多く植えてあるので、花時には櫻に亞ぐの美觀を呈する。

木賀

底倉を距る西北十町許り、仙石原村字木賀にある。二ノ平の直下、早川の西岸に位し、海拔一千〇七十尺。山谷の奇勝を以て箱根第一の稱がある。背後に丘陵を負ひ、辟邪泉は其溪間に懸つてゐる。西には早雲、明星の二峰相對峙し、脚下の溪流は急湍巨岩に激して雲霧を生じ、晴好雨奇、千變萬化、殊に秋の紅葉は最も美觀を呈する。温泉は巨大な岩脈を傳ふて其の兩側に湧出してゐる。此の地は近年椎茸の栽培に好成績を擧げて一名産を産出するに至つてた。旅館に成駒屋、宮内旅館がある。

五尺柴門常不扁、一痕山月入簾青、閑人心事人知否、夜々溪流帶夢聽、

木 戸 松 菊

宮城野

木賀から早川の宮城野橋を渡ると、山中に珍らしい廣潤なる平原

がある。これが宮城野であつて、富士の眺望によく、春は櫻や桃が咲き亂れ、秋は秋草の燎爛と露を含む風情誠に得も言はれない。

ル將軍の碑

明治初年吾國陸軍の教官であつたルボン將軍は、木賀の地を大變愛好し、何時も龜屋に投宿してゐた。そこで此の地の有志が發起し、大正二年五月同將軍を記念する爲め、龜屋の庭に碑を建て、其の事蹟を傳へたものである。

強 羅

強羅驛の所在地、早雲山麓の傾斜地である。海拔二千尺、土地高燥にして閑寂、明星、明神の二峰と相對し、早川の溪谷を見下した所にある。ツイ最近迄は狐狸の棲む荒野原に過ぎなかつたが、小田原電鐵が、上強羅と下強羅との中間に遊園地を開き、遊園地の周圍には雅致に富める別莊を澤山建てたりした、めに、形勢頓に一變して一大理想郷を現出し、園内には和洋の珍草木を集め、音樂堂、動物園納涼場、大浴槽などの設備も整ひ、今日では全箱根の中心點たるの觀を呈するに至つた。旅館に強羅館、末廣、觀光館、吉沼、招電臺などがある。此處の温泉は早雲地獄



より湧出するものと、大湧谷から導いたものとの二種あるが、何れも鹽類性硫黄泉である。貸別莊には、日用必需品一切を備へ、水道、温泉の設備もあり極めて調法である。上強羅と下強羅との間にケーブルカーを通じて上下に便にしてゐる。

早雲地獄

上強羅から十三町、早雲山の麓にある溪谷である。火山の爆裂によつて草木枯死し、岩石は悉く灰色を帯びてゐるので此の名稱がある。

仙石原

今仙石原村といふ。箱根山中最奥の村で、頗る景勝に富んで居る。曾ては澁澤氏經營の牧場であつたが、今は陸軍の糧秣收穫場となつてゐる。冠嶽の北、早川の谷間に在る。湯本から早川に沿ふて登り、仙石原に至り、金時山の南に分水界を横斷すれば駿河の御殿場へ出る間道がある。其處の峠をウタウ峠又は御厨峠といひ、箱根足柄兩道の間である。それ故に徳川氏の時代、小田原藩が此の一帶の諸口を警固した時に、仙石原にも關所を置いたもので、それで其處の峠を御留峠と呼び、又乙女峠に作るのである。此峠は八面玲瓏の富士の全姿を眺めるに最も優秀の場所として

詩人畫家の推賞措かざる所である。温泉は上湯下湯に分れ、いづれも大湧谷から引いたものである。

三〇

史學雜誌——箱根底倉より宮城野を経て、千石原に越る嶺を碓井峠といふ、是を足柄の古道といふ。倭武尊の通行も此ならん、早く廢れて京都の官人の往來するものもなかりしなるべし。

大湧谷

強羅から急坂を上ること二十餘町、一名大地獄と稱し、箱根最近の噴火口である。冠ヶ岳の南、大湧川の東南にある温泉場で、下湯場、上湯場、元湯場、俵石の四湯泉に分れてゐる。地は即ち仙石原高原の一部で、海拔二千六百尺より二千九百尺、湖尻から流れ出る逆川は此の平原の間を通り、末は早川となつてゐる。俗界を遠く離れた閑寂境で、噴火の餘熱今尙は盡きず、到る處に硫烟を吐き、地下の鳴動は轟々として心膽を寒からしめるものがある。泉質は強羅と同一で、旅館には下湯に石村、上湯に石村、俵石に俵石閣、仙石元湯に仙郷樓があり、設備も山中にしては相當に出来てゐる。大地獄の巔きに閻魔の臺がある。此處に登れば眼界開け、展望

極めて爽快である。硫黄洞附近は硫化水素を發散するので、銀製品や銀貨等は忽ち黒色の硫化銀を生ずる。附近の堆積物を覆すと、往々美しい斜方錐形の結晶を發見することがある。又少しく隔つた溪流の澁には石膏を生じ、其の破片は到る處に散在してゐるのが見られる。中には結晶の正しいものもあつたり、また數多相集まつて菊花狀を呈してゐるものは菊石と呼ばれてゐる。

ゴルフコース

西は蘆ノ湖に接し、南は神山、駒ヶ岳等の高峰と連り、北に金時山、乙女峠の峻嶺を控へ、東方遙かに相模灘の烟波を絶望する絶好の地點十四萬坪の原野を劃して其中に九ホール、二千七百四十九ヤールのゴルフコースを設けてゐる。宮ノ下富士屋ホテルが事務所になつてゐる。東洋第一の大コースである。

金時山

一名猪鼻嶽とも言ふ。大江山の話で有名なる、頼光の四天王の一人坂田金時が、山姥に育てられたところと云ふ傳説がある。頂上に三個の石祠があり、展望の雄大なることは箱根連峰中の白眉である。海拔四千三尺、仙石原から二十五町、

三一

矢倉澤から三里餘、足柄村大字桑木から一里二十五町で山頂に達する。山頂には特に一つの巨岩を戴き、それが浸蝕作用で著しく奇形を呈してゐるので、猪鼻嶽と呼ぶやうになつたのである。此山の巔は、足柄上下兩郡及び駿東郡の境を接する所であつて、北方矢倉嶽に隣接してゐる一帯の山地は足柄山と汎稱せられ、足柄峠はその最低所を通じてゐる。金時山にはシラヒグサウ、ヤマオダマキなど美しい野草を隨所に發見することが出来る。

乙女峠

金時山から蟻の門渡の險を過ぎて十八町、姥ヶ茶屋から十町、屈曲迂迴せる峻坂を登ると頂上に達する。こゝは富士の眺望を以て世に聞えてゐる。箱根越の古道であつたが、足柄街道の盛んになるに従つて廢頽して仕舞つたのである。箱根に關を置かれた後は拔人と稱するものが、此から御殿場へと抜けて行つたので、改めて番所を設けて之を留めたので、御留峠と呼んだのを、後世乙女峠と改めたのである。

長尾峠

乙女峠の姉妹とも言ふべき關係の地位にある。宮ノ下から頂上まで三里十四町、御殿場から二里十九町、自動車を通じてゐる。

大雄山最乗寺

宮ノ下から木賀、宮城野を経、明神ヶ嶽を右に望みつゝ、上ること暫くにして左折し四望の風光を稱しながら坂を下ると有名なる道了權現を祀る最乗寺に出る。曹洞宗の名刹であつて、老杉古松鬱蒼として影を洩らさず、里餘に亘る大森林は山谷を蔽ふてゐる。道了と稱するのは當山の開祖了庵の徒弟で、無双の強力だつた人である。この人が應永元年以來師等を輔け、大木を伐り、巨石を除き、地を平らかにして道を開き、大いに開山の業に努め、遂に一大寺院を建立した。寺域頗る廣濶にして巨木天に沖し、谿水は清冽で酷暑も尙冷氣を催させる程である。十一面觀音を安置してゐる。山下には旅亭が立ち並び、賽客の上下する者頗る多い。關本から大雄山電車が小田原まで通じ、自動車は松田と小田原とに通じてゐて、交通の便は極めてよい。俗に小田原提灯と稱するものは、初めは當寺山中の材をもつて製したもの

であつて、それは靈山の材をもつて造つた提灯を釣して置けば、よく魍魎の怪を避け、狐狸惡獸近寄らずと信じられたものである。

新編風土記 最乗開山了庵當國大住郡糟屋庄の人なり、名は慧明、了庵は其號なり、通幻に従ひ、遂に法嗣十哲の上首となる、應永元年古郷に歸り、上曾我村竺土庵に住す、後一偉人の指導に任せ、當山を開く、時に異人二人來りて勞を助け、地を穿て鐵印を得たり。彼異人は矢倉飯澤二神の化身と云、されば速に功畢りて一寺起立成れり、其法制越の永平寺に倣へりとぞ、小田原記に、關本の最乗寺開山了庵和尚、此山に山居ありしを、大森寄栖庵常に信じ、此寺を建立しける云々、境内最廣く、山中松樹繁茂して、日影を洩さず、僧萬里の詩にも（最乗古剝樹參天）の句あり、是開山の遺囑にして、伐木を堅く禁するが故なり。

姥子

冠嶽の西北麓、大湧谷の西崖に當り、仙石下ノ湯から湖尻に至る途中元箱根村大字姥子にある。背後には巨岩累々として、細流其間を迂縈して湖尻に注いでゐる。強羅から二十二三町、湖尻から十五町、西には仙石原村あり、北に臺ヶ岳を望んでゐて、海拔二千八百七十餘尺、箱根の最も奥に位置し、幽邃閑雅の境地である。温泉は巖石を鑿掘した罅隙から湧出してゐる。弱性鹽類泉に屬し、溫度百十三

度、古來眼病に特効ありとして、遠近の浴客甚だ多い。浴舎は秀明館といふのがあつた。此邊一帶は盛夏の頃は翠綠滴るが如く納涼に適し、また晩秋の候に紅葉の名所として知られてゐる。

湖尻

姥子から緩勾配の坂路を下ること十四五町にして湖尻に達する。此處は早川の落ら口に當り、湖上一里餘舟行して箱根町へ行かれる。湖畔の道に沿うて行くと、箱根權現を経て元箱根まで一里半である。此處は東は仙石原の平原に連り、東南に冠ヶ嶽、西北に金時山を望み、風光甚だ優雅である。金時山の峯の少しく平かに見える處が乙女峠に當つてゐる。温泉を湖尻新湯と稱し、鹽類性硫黄泉であつて、溫度は攝氏四十度内外である。附近に湯の花を製造してゐる湯ノ花澤がある。

駒ヶ嶽

一名を駒形嶽とも云ふ。蘆ノ湯の西、箱根本社の背後に當り、双子、鷹巢二山に對立してゐる。蘆ノ湯の方面から小徑があつて、頂上まで三十町、海拔四千三百尺、山中に高山植物多く、山巔に立てば、全箱根の風景を眼下に眺め、富

士の秀嶺、相模駿河の海、共に一眸の内に蟠まり、眺望の雄大を以て知られてゐる。箱根神社に駒形神を祭るは即ち此の山神である。

新編風土記

駒ヶ嶽は箱根本社の後背に當り、駒形権現鎮座す、故に名付く。往昔は般若峰といへり。死出山は駒ヶ嶽の北にあり、此山の北麓に血の池と稱する池あり、方十間許り、平常水なく、雨後水あれば其色赤となり、蓋四山緒土の水落合ふが故なるべし。

硫黄山

一名を本宮山とも云ふ。駒ヶ嶽への道路に當つてゐるところで、硫黄の蒸氣が山一帯に立ち罩めてゐるので此名がある。

新編風土記

本宮山は挑灯山の續きなり、此山上に温泉あり、本宮の湯と唱ふ。其効験姥子の温湯に異ならず、近き頃出湯の乏しきをもて姑く廢せり、此地の北の方に當り湯花澤と唱ふる澤あり、則蘆湯の源にて、幅一間餘の流なり、湯の花もと此處より生ず、故に名付く、昔は元賽河原より死出山に登り此温泉に通ひしが、元文中此路を停止せられ、蘆湯へ出、湯の花澤邊より往返することゝなれり。小地獄山は本宮山の北にあり、山の北半腹に小地獄と唱ふる所あり、熱湯沸出す、是は今底倉村に隸す、大地獄山は小地獄山の西にあり、山中熱湯沸騰する事小地獄よりも甚し、常に炎烟空を衝けり、緣起に「乾有燒熱之大岡、欲使人厭離穢土、現出淨利之神通智力也」冠ヶ嶽は大地獄山の東南にあり。

神山

駒ヶ嶽の西北に竝んでゐる、箱根山中の最高峰で、高山植物も多く、眺望も極めて雄大である。蘆ノ湯から湯ノ花澤を経て約一里、登山道路がある。全山灌木に鎖されて、登山するものも稀であつたが、道路を開通して道標を建て、ベンチを設け、其麓に文化住宅を設立などしたので、近來探勝を試みるものが非常に多くなつた。海拔四千七百尺。

神山のかしはのくぼてさしながらおひなほるみのさかゆべきかな

相模家集

蘆ノ湯

小湧谷から登路一里十五町、海拔二千八百七十尺、箱根温泉中最も高い處にある温泉場である。二子山は南に秀で、駒ヶ嶽は西に、辨天山は東に峙ち、硫黄、火燈の丘陵は、其麓に起伏して東北の方僅かに開け、眺望稍や開豁である。斯かる地形の常として朝夕の雲霧の去來、氣象の變化極めて面白く、近來は外人の此地に避暑する者も年と共に多くなつたやうである。温泉の涌口は仙液湯、達磨湯の二ヶ

所であつて、多量の硫黄分を含有し、濁色にして硫黄の匂ひがある。旅館には松坂屋、紀伊國屋、吉田屋あり、何れも三層樓の巨館で、運動場、玉突場などの設備がある。此地から箱根町に下りて行く一里二町の間、曾我兄弟の碑、多田滿仲の墳、精進池、齋の池などがあり、この二つの池のあるところを賽の河原と呼んでゐる。

新編風土記

蘆の湯は江戸より行程二十四里二十八町とす、箱根社傳によれば此も彼社域の内なりしとぞ、山中高街の地、常に風烈しく、草木繁茂せず、夏月も涼氣多く、蚊帳を垂るゝことなし、固より廢土にて田園を開くことを得ず、箱根七湯の一所也、此泉礬石硫黄の氣甚し、新刀を其邊に置けば必ず鐵鏽を生ず、泉濁りて些の鹹味を帯ぶ。

鑛泉志——蘆湯は仙液湯（百七度）達磨湯（九十八度）の二源にして、共に硫黄性也、其地は標度凡二千七百六十尺、浴舎數戸あり、櫻現坂を経て元箱根村へ一里、瀧坂を経て畑宿へ二十八町、

笛塚

蘆湯の東北、穂無し平山にある。高さ九尺許、方二間、新羅三郎義光が兄義家を援けるため奥州下向の砌り、伶人豊原時秋に笙の祕曲を傳へた舊跡である由、時秋物語にのせてある。

阿字ヶ池

辨天山の西麓にある。東西八十間、南北百二十間、池中には蘆菅が一面に生ひ茂つて、其の東北岸に鐵鑛泉が湧出してゐる。黄白色の半透明である。

薬師堂跡

松坂屋の三階の側の坂を登つた處に廢堂がある。境内に澤山の句碑がある。加茂真淵の「ひさかたの天の御寶おさむとか箱根の山は作りけらしも」又谷文晁、淡齋、愚庵榕齋、詩佛、陰桃などの句碑がある。

鶯坂

蘆ノ湯から元箱根へ通ずる二子山北麓の坂道であつて、宗尊親王の「この山は富士の高根の見ゆればや時知らぬ音に鶯の鳴く」と云ふのがある。鶯坂とは樺山大將の命名であると云はれてゐる。

曾我兄弟の墓

温泉場から五町、三つの石塔が並んでゐる。大きい二つが兄弟のであつて、小さい方が虎御前のものである。

二十五菩薩

曾我兄弟の墓から半町、竹林中の大岩に二十五體の地藏尊を彫りつけてある。永仁元年に大地震があつて、其時の死者の供養の爲めに建立したもので

ある。それから半町ほど行くと、多田満仲の墓がある。高一丈一尺の古墳である。

蘆の湖

富士八湖の一つとして知られてゐるけれども、富士には関係なく、

純然たる箱根火山の火口原湖である。箱根山頂にあつて、箱根町及び元箱根の西北方に横はり、東西二十町十五間、南北一里二十三町、周圍四里三十町深さ四十六匁。中央火山たる二子、駒ヶ嶽、神山、冠ヶ嶽等の西南、外輪山との間にある大澤であつて、謂ゆる火口原に停水したものである。其形状瓢の如く、其の過剰の水は北方外輪山の一部を突き破つて、中央火山の東北を廻流して早川となつてゐる。沿岸が多種多様に屈折して岬となり半島となり、小灣を爲し、風光の變化が極めて面白い。湖邊には籬宮がある。冠ヶ嶽、駒ヶ嶽は東岩に突起し、北は金時山に接し、西の方遙かに富士の秀峰を望み、其の影時に鮮やかに湖面に映ることがある。之を箱根の倒富士と言はれてゐる。又湖中には鱒を産し、早川には香魚が生棲する。

二所へ参りし時箱根のみづ海を見て

たま櫛笥はこれの海はけけれあれやふた山にかけて何かたゆたふ

(夫木集、實朝)

玉くしげ箱根の山のみれふかく水海見えてすめる月かけ

(夫木集、慶融)

詠箱根山歌 四首之一

眞淵

東路の、箱根の山の、山のへに、湛ふる海は、黒き海に、白き波たち、ある空近み、水か湛ふる、天の川、流れか通ふ、久方の、あめ尾羽振の、みことかも、塞きたまへけむ、神代より、かれせぬ海に、わたつみの、宮べにありとふ、由つかつら、それならなくに、千尋杉、おひたちながら、水底に、埋もれにつよ、八百世にも、千世にもうせず、くちもせず、今のをつよに、見るがあやしき、

平洲

關開鳥道霧中微、嶺樹千重帶曙暉、共喜秋晴遇神助、湖雲嶽雪望依々

鐵心

踏破一險了、一險起前途、登々脱險處、有湖紺碧鋪、久矣官路險、何日平如湖、

夷關紀行 箱根の山、岩が根高く重なりて、駒もなづむばかりなり、山の中に至りて、水海ひろくたよへたり、

今よりは思亂れて蘆の海の深き思を神にまかせて、

寂蓮集 十月ばかりに、東の方にまかりけるに、箱根とふ山をなん越ける、所の有様怪しく、尋常に變りけり、遙に峰に登りては海を渡り、谷に下りて雨を躡む……

都土産 (筑紫宗久の紀行) 浮島原を過て箱根に詣つ、實に權現のあらたなる御誓ならすば、この山の巔にかゝる水海あるべしとも覺えず、いと不思議なり、此所をば此世ながらの冥途と申傳へたるにや、所の様

もなべてには替りたる事とも多かりし、いつとなく浪風あれて、いとすさまじく見え「箱根路や水海ある、山風にあけやらぬ夜のうさぞしらる」と

名所方角抄(宗祇) 箱根山の頭に水海あり、言語同断、及び難き地景なり、湖水北南へ五十町、東西は近し、東の汀に切々有之、其上権現社壇御座なり、西向なり、湖の南の汀に蘆川の宿とて、百家許家あり、此湖に富士の影移て、西に見えたり、眺望無雙の地なり。

羅山東行日録 箱根山上、有湖方二三里許、唐人詩、山頭水色薄籠烟、遠客新愁長慶年、我今似之、周易有之、山上有水、蹇君子、以反身修德、我今思之。

産業事蹟 箱根湖の疏水は駿州駿東郡に通ぜしむ、其益を後世に與ふる頗大なり、其工事は寛文八年八月より着手せり、其法一方は湖水を距る四十六間の處より掘り、一方は山後の下口より掘ることとし、同十一年四月竣功を告げたり、此總費用凡八千兩、人夫一日八十文なりしとぞ。

新編風土紀 蘆の湖は一名鑊字池と云ひ、正保及び元祿國圖に、長一里半、横十六町、廻四里十町、深三十七尋と載す、則權現の御手洗池なり、湖の四涯に七箇の津あり、白川津(北涯にて社に添へり、此津の出先を象ヶ鼻と云)相模津(東涯にて賽の河原に添へり、縁起曰、東濱名相模津、又曰、荏彼境、業障懺悔、故稱懺悔津)室河津(相模津に續けり)花川津、伊豆津、佐奈太津(以上南涯にて、涯上山頂を踰れば伊豆國君澤郡なり)駿河津(西涯にて、涯上の峠を登れば、駿河國駿東郡なり、此津の出嶋を龜ヶ崎といふ)と號す。又湖中に五名木あり、錫杖木(白河津の邊にあり、形似を以て名とす、安永中巨波の爲め、岸にうち寄

せらる、故に取て寶庫に納置く、白檀に似て香あり)目代木(計計良木と訓す、錫杖木の西北、湖心に立てり、丸き木にて、切口の徑二尺五寸、此木のある所、古は三國の界域なりしとぞ、縁起曰、熱觀四境風致地、跨伊駿相三州、因分其域、而良材立波心、號名目代木)梅檀訶羅木(目代木の西、波心に立り)故杉(古須紀と訓す、西の方湖水の落口、ドウコ淵と唱ふる水中に立ち、切口の徑四間程、中は空口となり、宛然桶の如し)影向杉(夜宇加字須紀と訓す、白川津の涯にあり、大さ一圍許)これなり

新編風土紀又曰 室河津の傍に一島あり、堂が島と名く、齊明天皇の時、玄利老人一寺を此島に建つ(縁紀曰、齊明天皇時、玄利建一寺于彼島、島北面有怪岩、自是大悲尊容也、因名補陀落伽山、又有人云、本朝有過現未三峰、金峰、葛城、古峯也、文武天皇時、有行者優婆塞、宿彼島蘭若、而自室河津、巡行土山之麓、以當山峰自準富士峰以還、天下高僧無不拜覽矣)故に堂ヶ島の名あり、今皆廢し、島上北の方に辨天の社あり

箱根町

箱根の嶺上蘆ノ湖の東岸にあり。東海國道の衝に當り、北には湖水を隔て、駒ヶ嶽が聳え、東北には二子山、南には日金山があり、西に富士を仰ぎ、東南山嶺の盡くるところから、遙かに相模灘を望み、好風景の地である。東は湯本から二里二十八町、西は伊豆の三島へ三里二十町、又湖岸傳ひに元箱根村湖尻まで凡そ二里、十國峠を經伊豆熱海温泉まで凡そ五里、町の東端に箱根關の舊蹟がある。

一夜とも宿をばかへすあまたびたちよりて見る葦川の波（夫木集海道百首參議爲相）

新編風土記——康曆二年二月、箱根山葦河宿の邊に關門を置かれし事、鎌倉圓覺寺文書に見ゆ、嘉吉元年五月、故鎌倉管領持氏の幼息春王安王生捕られ、上洛せる頃、永享記に箱根山足柄宿を載す。宗祇の名所方角抄にも、箱根湖水の南に蘆川宿ある事を載す。（曰、箱根山、三島より二十一里なり、山の頭に水海あり、湖の南の汀に葦川の宿とて、百家許あり）以上古記に載する蘆川宿、足柄宿等、皆同所なるべし、而も此地元和四年の新驛といひ、且箱根權現社傳にも、古の箱根官道は蘆湖の北涯を廻り、豆州に出しといへば、蘆川宿などいへるは、全く今の元箱根の邊なるか、されど今の蘆川町は即ち湖水の南涯にありて、其方位は方角抄に記する所と能く合へり、然れば概して元箱根ともなしがたき歟、今より考ふべからず、此地は山間にて雨濕深く、寒氣も殊に強く、夏月も蚊帳を垂る事なしとなり、産物に山生魚、及び箱根草等あり。

元箱根町

箱根町の北半里、湖岸にあり、二子山八丁坂の下である。舊東海道と箱根宮ノ下から登る新東海道との合する辻に當り、小涌谷から自動車の便もある。西に蘆ノ湖を控へ、東北に二子山が連なつてゐる。湖水の風光明媚にして清涼なので暑中は避暑客で賑ふ。旅館には蘆ノ湯松坂屋の支店松坂屋ホテルがある。

箱根神社

元箱根村にある。所謂箱根權現であつて、蘆の湖畔の老杉鬱蒼たる

る中に鎮座してゐる。往古は關東の總鎮守で、社傳によると人皇五代孝昭天皇の御宇より崇められたものであるとか、又源頼朝石橋山の戦に敗れた時、一時此處に難を逃れたと言はれてゐる。社前には頼朝の鷹狩に用ゐたと稱せらるゝ巨大な釜がある。

新編風土記——箱根權現は僧義堂が日工集に、神功皇后の時、武内大臣創すと記せしは、何の據あるにや、社傳に見えず、大江公資相模の國守たりし時、其妻女乙侍從（相模と稱す）當社に詣で、百首の詠歌を兩度奉る。

明くれの心にかけて箱根山ふたとせみとせいでぞたちぬる

（相模 家集）

箱根山明暮いそぎし道のしるしばかりは有としらなむ

（同上箱根別當）

源頼朝兵を伊豆に起し、當社に祈請し、遂に幕府を鎌倉に建つ、乃ち箱根走湯をば二所と稱し、年毎に將軍參詣あり、或は奉幣使を立られ、其崇敬大方ならず、北條新九郎入道（宗雲庵宗瑞）當國を掌握せし後、永正十六年四月、永錢四千四百六十五貫六百十四文の地を寄附あり、是は其頃幼息菊壽丸（左京大夫氏綱の弟、後剃髮して長綱と稱し、四十世の別當となる。退院の後、更に幻庵と號す）別當坊にありて出家得度ありしかば、其實は別當領及び菊壽丸知行分に宛行はれしなり、其子北條左京大夫氏綱の時に至り、大永三年六月、社頭僧坊等盡く新造あり、元正十八年小田原陣の時、兵燹に罹り、堂宇以下烏有せり、御當代に至りても、先

規に任ぜられ、文祿三年、豆州君宅郡澤池村に二百石の神領を附し、社地不入の朱印を賜り、慶長十七年、社殿造營、元祿十年再修、大永の棟札に「相州西富郡足柄郷、箱根山東福寺、三所大權現、大檀那伊勢守氏綱（花押）云々」



箱根離宮

元箱根から老杉鬱蒼たる間の街道を過ぎ、再び湖畔に出ると塔ヶ島の半島の上に見えるのが箱根離宮である。小規模の建築物であつて、四邊の風光と極めて調和が可い。

箱根關址

離宮と箱根町との間にある。小田原藩の警衛して海道に備へた所であつて、東は要害山の險崖、西は蘆の湖に倚り、誠に天險とも言ふべき地を扼してゐる。明治二年に廢せられ、今は石壘の殘礎と、一本の松の樹とが昔を物語り顔に淋しく立つてゐる。同所の石内旅館には關所の古文書が澤山に残つてゐる筈である。

函 嶺

双 石

萬馬嘶天際、叩關人作群、密林含細雨、怪石扶層雲、鎖鑰巖疆守、貔貅血戰勳、英雄窺竊據、駕馭寄英君、

箱 根

秀 野

騷牆三五步、股栗入關來、雪抱三峯出、湖磨一鑑開、煙林禽格磔、石路馬嘶墮、山釀雖言薄、客愁能作灰、
新編風土記——抑々箱根山中に關隘を置かれしは、尙しき事なれど、其地は變遷ありしとみゆ、承久の亂に、鎌倉の評定に、足柄箱根兩道の關を固め、官軍下向を待つべきの議あり、此頃既に關ありし事知るべし。其地は何れの所なりや考ふべからず、康曆二年文書、箱根蘆川宿の邊に關を置き、其特征錢を鎌倉圓覺寺の修理の料に充つること見ゆ、應永十三年六月の文書に、箱根山水飲關所の事を載す、此頃は尙豆州山中の水飲にも一關ありしならん、天正七年、北條氏より山中城を増廣め修營せし時、水飲倚崎を城構に取入る。是は昔の關所の跡なりと見ゆ。

日本地名辭書——按ずるに、箱根足柄に近世の初めまで二道並び通ぜり、初め延曆中足柄路一旦廢せんとせしが、又箱根を止めて足柄を以て驛路に定められ、爾來此兩路、一は迂と雖險艱甚しからず、一は直と雖險艱特に大なれば、行旅の徒、各便宜により、其所由を定めたり。江戸幕府の時足柄を塞ぎ、箱根を以て公私の往來に供せしめ、前代兩路並道の習例一變す、近年鐵道車載の事起り、又一變をなす。

十六夜日記——伊豆のこふを出て、箱根路にかゝる、いまだ夜深かりければ、
玉くしげ箱根の山をいそげども猶あけ難き横雲の空

足柄山は道遠しとて、箱根路にかゝるなり

ゆかしさよそなたの雲をそばたててよそになしぬる足柄の山

いとさかしき山をくだる人の足も止りがたし湯坂と云ふなるからうじて越はてたれど麓に早川と云ふ川あり

鞍掛山

箱根町から巔まで一里、徒歩一時間を要する。海拔三千二百尺、山上は四面の眺望ひらけ、脚下に蘆ノ湖の全部を瞰下し、相駿の海波、富士天城の諸峰悉く一眸の裡に鐘る、途中に野馬ヶ池といふ小さな池がある。

十國峠

箱根町を立つて道を鞍掛山にとり、登ること二里餘にして日金山の絶頂に達する。海拔二千六百餘尺、十國五島見ゆるを以て此の絶頂を十國峠と云ふとある、自然石に左の碑文を刻んである。

伊豆國加茂郡日金山頂所觀望者十國五島、自子至卯、相模國、武藏國、安房國、上總國下總國、自辰至申其國所隸之五島及遠江國、自酉至亥、駿河國信濃國甲斐國、天明三年東都林居士諸島出雲光英源清侯等應熱海里長渡邊房求之需建之

所謂十國とは伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、遠江、駿河、甲斐、信濃であつて、更らに駿河灣、相模灘の碧波を脚下に下瞰し、眼界頗る廣茫、稀に見るの壯觀である。頂上から少し下つたところに日金地藏があつて、其前に一軒の茶亭がある。こ

こから一里半の急阪を下れば即ち熱海温泉である。又日金地藏堂の前を左折し、下ること一里半にして湯河原に達する。但し此の山道は頗る險難であるから、健脚者でないと、却々踏破に困難である。

○ 四方山のにしきや富士にはづかしき

日金山

也 有 盤 溪

群巒環遶海成灣、隔海青螺一帶山、忽覺飄然換凡骨、神馳五島十洲間、

松崎儉室遊記——文化元年、五月日、從熱海登日金山、路出木宮右、二里至四面塔、梵碑也、右行二里漸上、林木鬱然、至土澤地藏堂、在家僧主之、路漸險、山漸秃、暑氣赫々、汗洒然下、腹背皆濕、五里通日金地藏堂、主者三四屋、亦在家僧也、又行半里、右折而上、半里而遠、曰丸山、日金嶺也、山身南連天城、北屬箱根、草茅滿目、蓋天下陋觀也、然而其名于勝槩者、自他山而來、甚矣、麗澤之不可以已也。

施行平

箱根峠から三島へ下る二つ目の平地に接待茶屋がある。昔江戸吳服町の豪商加勢屋與兵衛が、重き荷を負ひ嶮しき山道を往來する人馬を憐み、傳馬一

頭に豆三合、一人に茶を施したところで、中頃廢れてゐたのを、明治六年下總國性理教會の教長遠藤亮規と云ふ人が再興を思ひ立ち、途中で没したのを、門人が其の志を繼いで、明治十二年に庵を結び、行人に茶をすゝめ、焚火にあたらせなどして専心施行することにした。

箱根の名物

湯本細工、湯ノ花、小田原の鹽辛、梅干、箱根草、湯ノ花染等

旅杖の痕

海道記 源光行

けふ足柄山をこえて、關の下の宿にとまるべき日暮。烏むらがり飛んで林頭に驚ねぐらをあらそへば。山の此方竹の下といふ所にとまる。四方は高山にて。一川谷にながれ。嵐落ちてまくらを洗ふ。聞けばこれ松の音霜さえて袖にあり。拂へばたゞ月のひかり寢覺のおもひにたえず。ひとり起居て残りの夜をあかす。

見し人にあふ夜の夢のなごりかなかけろふ月に松風のこえ
ふくる夜のあらしのまくらふしわびぬゆめもみやこに遠ざかりきて
十六日。竹の下を立て。林中をすぎて遙々と行けば。千束のはしを獨梁にさしこえて
足柄山に手をたて、登れば。君子松いつくしくて。貴人の風過る笠をとがめ。客雲梢にかさなりて。故山の頂あらたに高し。朝の間雨ふりて。松の風聲の虚名をあらはす。

ほどなく日岳？の東にのぼりて。雲はやく驛路の天に晴れぬ。彼山祇のむかしの歌に。遊女が口につたへ。嶺猿の夕の啼は。行人の心をいたましむ。(むかし青墓の宿の君女。此の山をこえけるとき。山神おきなに化して歌を教へたりけり。あしがらといふは是なり)時に萬仞峯高し。樹根にまとふて腰をかゞめ。千里巖さがし。苔の鬚をかなぐりて脛をのゝく。山中を胡馬がへしといふ。馬もしこゝに留まらましかば。此山をば鞍馬とぞいはまし。これより相模國にうつりぬ

秋ならばいかに木葉のみだれましあらしぞおつるあしがらの山

關下の宿をすぐれば。宅をならぶる住民は。人を宿して主とし。窓にうたふ君女は。客をとめて夫とす。あはれむべし。千歳の契りを旅宿の一夜の夢にむすび。生涯のたのみを往還の諸人の望にかく。翠帳紅圍。萬神の禮法異なりといへども。草菴柴戸。一生の觀念これ同じ

さくらとてはなめく山の谷ほこりおのがにはひもはるは一とき

道は順道なれども。宿を逆川といふ所にとまる。(潮のさすときは水の上さまに流るれば。逆川といふ)北は片岡田^{てんわう}うちすきみて。薄の焼おれ青葉にまじり。南は満海蒼波わさあがりて。白馬ならび渡る。しかのみならず。前汀東西素布を長疊の浪にあらそひ、後園町段緑衫を萬莖の竹にかり。時に暮行く日脚は。景を遠島の松にかへし。來り宿る疎人は契りを同驛の薙にむすぶ。彼の草につなぐ疲馬は。胡國を忍びて北風に嘶へ。野にやすむ群牛は。吳地にならひて夜の月に喘ぐ。棹歌數聲。舟船を明月峽のほとりによせ。松琴萬曲。琵琶を潯陽江の汀に聞く。一生のおもひ出。今夜の泊りにあり。

行とまる磯邊の浪のよるの月たびねの袖にまたやどせとや

廻國雜記 道興准后

小田原に着きはれば。早川の浦とて。水上は大河にて。海邊に續きたるによりて。かやうに申し侍るとなむ。

末とをくながれ出たるはやかはの浦や千尋の波路なるらん
一夜此の所に泊りて。旅泊の愁緒かへりて其の興も多かりけり。終夜まどろまん隙も侍らざりければ。

あしのやは波をまくらに敷たへの床にはゆめのたちも歸らで
是より箱根三島などへ參詣せんとして。風祭りの里と云へる所にて。渡し舟さしよせける時。

こがらしのにしきをたゝむ箱根山あけて見るにぞ紅葉なりける
あらしふくをへの紅葉散みだれにしきをたゝむはこねやま哉

丙辰紀行 林道春

永仁四年に。此山の鐘を鑄て銘をさざみし其序に。當山
蓋山嶽之神秀者也。孝謙皇帝御宇天平寶字年中。萬卷上人草創。擇地三所權現松孺
並菴。とさへり。中比炎上せしを。北條氏再興して。十二州の鎮守とす。山上に湖水

あり。神靈のすむ所なりとて。古しへより。人のつゝしみ畏れて。今に入る事も侍らず。舟を浮べて。めぐりありく事はありとなん。後別當の語りしは。仙人四代この山に住て。駒形の深祕をあらはし。役小角も爰に來りて其跡をのこし。熊野權現と此神と一躰にてまします。くはしきことは記録にありと申しき。

長坂脩途不可攀。惟天設險甲東關。回頭木末待吾僕。信足湖邊濯溶顏。跡
背浪高伊豆島。馬蹄雲起宮根山。相逢盡道歸耕事。歲々年々幾往還。
雪か花かあけぼのかすむ宮根路を越れば峯のあとのしら雲

庚子道の記 武女

かくて千本の松原を見やりつゝ。沼津の宿にやどる。二
日は關をこゆとて。夜深く宿をたちて。星のひかりや、白むころ。伊豆の國府につく
三島の神の御社の前にしばし憩ふほど。女はさはりがちにて。えまうです。心ばかり
のぬさ奉るついでに。

行歸りみしまの神の宮よりもふりぬるものは我身なりけり

箱根山に入るに。初音が原といふ所を過ぐ。枯たる杉のむら立てるうちに。鶯のひなどもの巢だちたるが。多く鳴くをさくに。春は早おくれたれど。猶めづらしきこゝちす。何某の僧正にきかせ奉らましかば。郭公ならでもおぼすらんよなど言ひて。すける人々は歌よむもあるべし。みつやなどいふあたりは。緑の林茂りたる蔭をたのみて。世にしらぬもの、旅行く人をわづらはせし事。むかしはありしにこそ。今は里人の家居もあまた建續きて。道ひろき御代なれば。心ゆるして馬の上こしの内などにある限りは。眠りてさへも行く也。山中といふ所に糸櫻の見ゆるを。

玉くしげ箱根の山のいと櫻あけなばいかゞよるのみぞ見む

といへば。月の夜などはこの歌もあはれならんとて笑ふ。げに旅にていひ出る言は。常のに今一きは劣りて。われさへ覺ゆれど。後引直さんものうくて。さて置きし也。午の時ばかり關にいたる。山のかひには。くぎぬきしわたし。關屋には弓やなくひな

ど。さらしくしう置かせたれば。ことなき身にも胸つぶれ。手足さへぞふるふ。かしこき陰とたのみつる笠も扇もとられたれば。つくろはぬ面に。ふくだみたる髪のこぼれかゝりて。いかに見苦しからむと。汗あえてけり。さは言へ。あそびくゞつの類は人の外なる定ありとて。聊かのさはりもなく通し給ひつ。嬉しとや言はまし。哀しとや言はまし。今日は坂あまた越ゆるに。山駕籠も不要なりとて。歩み苦しき石の上を。徒歩にてたどりけるまゝ、いといたう疲れ困じぬ。畑湯本風祭小田原。節は五月とかや。されど彌生の三日こそ。心もはなやぎて。桃のにはひに空さへ酔へる景色は。菖蒲の長さねも。かけて及ぶまじう覺えたれ。早川の瀬渡るなど。己の日の祓おもひ出で、

早川にくだす鹽木をあまの子の身のかたしろと人や見るらん

川を渡れば酒匂といへる里なり。こゆるぎの磯近き筈屋の内にも。雛遊する少女どもは。桃山吹の花など。こちたきまで瓶にさし。今日の日の暮るゝを惜しと思へるさま也。野に出て。はゝこなど摘むものあるは。今日の餅の爲なるべし……

『名勝研究』 刊行趣旨

旅行趣味は文明の進歩に正比例して普及の趨勢にあるところの、至上の趣味であります。然るに旅行者にとつて尤も遺憾なことは、智識階級者の手引に不足する、案内書の無いことでありませう。本會は此の缺陷を補ふと共に旅行趣味の普及を圖らんが爲めに組織されたものであります。

本會の事業

- 一、本會の會員は毎月金四十錢也の會費を納めます。
- 一、會員に對しては毎月一冊づゝ「名勝研究」の美本を配布します。
- 一、本冊子刊行の一の目的は教養ある旅行者に、遺憾なく旅行の趣味と實益とを享受せしめる點にあります。

- 一、第二の目的は今日の小、中、女學校の地理教授に興味豊かなる參考書を提供するにありませう。
- 一、第三の目的は常に旅行者の指導たるばかりでなく、之を机上に讀いても、恰も現地を逍遙するの思ひあらしむる清新なる讀み物である點にあります。
- 一、第四の目的は、一冊の冊子を單獨に綴れば一個の名勝誌であり、刊行を重ねて之を綴斷すれば、系統ある風俗誌ともなり、宗教誌ともなり、山岳誌ともなり興亡誌ともなる點にあります。以上の趣旨に御賛同下され、御入會あらんことを切に御勸誘致す次第であります。

日本名勝研究會

本會顧問 田山花袋
同 守武陶雨
會長 副田丘村

昭和二年五月廿五日印刷
昭和二年五月三十日發行

箱根山奥附

著者 日本名勝研究會

發行者 副 田 勉
東京市外野方町下沼袋一六二〇

印刷者 渡 邊 爲 藏
東京市京橋區日吉町

印刷所 民 友 社
東京市東橋區日吉町

發行所 日本名勝研究會
東京市外野方町下沼袋一六二〇

549
293

